# 12 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 12 月 10 日（日）10：30～11：30　待降節第 2 主日
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「暗い所に輝くともし火 」
■聖　書　新約：ペトロの手紙二 1 章 16～21 節（新約 p437）
■讃美歌：229「 いま来たりませ、救いの主イエス、」
　　231「 久しく待ちにし」

1 週間が経過するごとにろうそくの火が増えて、本日は待降節第 2 主日になりました。日本基督教団の今年の聖書日課は先週もそうでしたが、みどりごとしてこの世に降誕された主イエス・キリストを待ち望むというよりは、やがて時至って再びこの世に来臨される主イエス・キリストを待ち望むという観点から、聖書の箇所が取り上げられているという印象を受けます。ですから、2000 年前の救い主の誕生をファンタジーとしてお祝いするというよりも、私たちが今置かれている現実をしっかり見つめながら、必ずこの世界に救い主が来られるという確かな希望を新たにされる時として過ごしたいと思います。なぜなら、今の私たちにとって本当に必要なものは、主なる神様がこの世界を導いておられるという確信を与えられることではないか、と思うからです。振り返れば、2019 年 12 月に始まったコロナウィルス禍という状況の中で、私たちは出口の見えない重苦しさを 4 年間も味わってきました。その期間に、2022 年 2 月からウクライナでロシアの侵攻により戦いが始まり、今年 2023 年 10 月からはガザ周辺でハマスとイスラエルとの闘いが始まりました。それ以前からも、世界のあちらこちらで戦いがあり紛争が続いています。最近ある方から頂いたお便りには、「どのように祈ったらよいのかわかりません」という言葉が記されていました。そのように、私たちの間でも、神様への信頼が揺らぎ、無力感に苛まれるということが起こってきているのではないでしょうか。

さて、本日共に読んでおりますペトロの手紙二は、当時キリスト者に対する迫害が続いているという状況下で書かれました。そして、そのような外的な苦しみと同時に、共に主イエス・キリストを信じて集まっているはずの教会内部にも問題が生じているという深刻な状況がありました。その意味でこの手紙は、現代の私たち、言い換えれば教会の礼拝に集っている信仰者や求道者の内面の問題に光を当てているということができます。そのような中で最も陥りやすい問題は、主なる神様への疑いや信仰を持つことへの諦めなどが生じることです。それに対して、このペトロの手紙二は語りかけていると言えるでしょう。ペトロの手紙二は、2 世紀の半ば頃に、新約聖書 27 巻の中でも最後に書かれたものと言われています。最初に 1 章の 3、4 節で「3 主イエスは、御自分の持つ神の力によって、命と信心とにかかわるすべてのものを、わたしたちに与えてくださ

いました。それは、わたしたちを御自身の栄光と力ある業とで召し出してくださった方を認識させることによるのです。4 この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています。それは、あなたがたがこれらによって、情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためです。」と力強い約束の言葉を語って、この手紙の方向性を打ち出しています。

本日の箇所 1 章 16 節で、使徒ペトロの信仰を受け継いだであろうこの手紙の著者は、「わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨」と語り出しています。「来臨」とは、将来、罪と死が滅ぼされて世界が完成される終末の時に、主イエスがあのクリスマスの時のように、天からまたこの地上に来られる再臨を意味しています。その来臨への信仰と希望を根源から揺さぶってくる敵として、16 節で「巧みな作り話」という言葉を語っています。「巧みな作り話」は、信仰を諦めさせ、神様への信頼を無駄なものと思わせ、そこからくる希望を失わせるようなものです。なぜなら、主イエス・キリストの存在とその具体的な救いの御業をおとぎ話のような寓話に仕立てて、現実のこととして見ないという考え方から来るからです。それに対して著者は、17 節で「荘厳な栄光の中から、『これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者』というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。」と記しています。ここでは、マタイ、マルコ、ルカの 3 つの共観福音書に記されている、主イエスが高い山に登られたときにその姿が変わったというよく知られていた「イエスの変貌」と呼ばれる出来事が、「巧みな作り話」ではないという根拠として挙げられています。それは、使徒ペトロから受け継いでいる重要な出来事の伝承だったことでしょう。そこでは主イエスの変貌を復活の前ぶれとしてではなく、主イエスの再臨の勝利の栄光の前ぶれとしてとらえ、語られています。ペトロの手紙二の著者は、そのように語りかけることによって、キリストの再臨の生ける信仰を人びとの中に呼び戻そうとしています。それは、今一度、信仰の目によって十字架の出来事を見ることをしてほしい、ということです。「わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです」と断言できる信仰を与えられた著者と、主イエスの変貌の出来事に遭遇し圧倒された使徒ペトロの姿が重なります。著者は、おそらく使徒ペトロが力強く証していた出来事を今一度語り、他の信徒への励ましとするだけではなく、自分自身にも語りかけていたのかもしれません。

そして著者ペトロは、さらにもう一歩進んで語ります。それが、説教題に選んだ御言葉が含まれている 19 節です。「こうして、わたしたちには、預言の言葉はいっそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意していてください。」著者は、完全な信頼に値するものとして聖書の御言葉を挙げ、「聖書の御言葉をあなたたち教会に集っている人は知らされているのだから、その御言葉に細心の注意を払うべ

きです。」と勧めます。なぜなら、その聖書の御言葉こそが、暗い所に輝く光に、そして、あなたの心の中の明けの明星になるのだから、と語っています。明けの明星とは朝の一番明るい一番星だそうです。夫が毎朝五時ごろに暗い中で散歩に出ます。そうすると、一つだけ高く明るく輝いている星が見えるそうです。残念ながら、私は見たことがありません。明けの明星という言葉のもともとの意味は、光を運んでくる者であることを今回知りました。私たちもまた、ペトロの手紙二を受け止めた二世紀半ばの教会に集う人々と共に、時代を超えて、その光を心に深く受ける者になりたいと切に願いましょう。

最後に、大事な事柄として20節21節が語られています。「20 何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。21 なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。」聖書の御言葉は神の聖霊に導かれた預言者たちによって語られたものであり、それは人間の意志ではなく、神の意志に基づいていると語られています。けれども、この世には神様のお示しくださる道とは異なる人間の道があり、そこには巧みな作り話に過ぎない自分勝手な聖書の解釈があり、神様の御心に適うよりも人間の心に適う道を示している、というのです。私たちもまた、自分自身の思いや願いに敵う道をいつの間にか求めてしまうかもしれません。そうならないように、祈りつつ歩みたいと思います。キリスト教系の新興宗教と言われる宗教には、聖書に似た経典などがあるようです。しかし、全くの自分勝手な聖書の解釈に基づいたものを経典とすることによって、キリスト教とは全く似て非なるものになっています。まさに今の日本で、そのことに関しての多くの問題が明るみに出されています。そのような中で、私たちは「暗い所に輝くともし火」としての聖書を本当に重んじ、そこに証しされている主イエス・キリストという「明けの明星」を見上げながら、クリスマスへの道のりを進んでいきたいと思います。

★立川教会の「クリスマス礼拝」は１２月２４日（日）の午前１０時３０分からです。
蝋燭を灯しての「クリスマスイブ礼拝」は１２月２４日（日）の午後７時からです。
どちらの集いにも、どうぞお出かけください。